

『源氏物語』の「葵」の条に、桐壺帝の崩御で新天皇が即位されるので、「齋宮：サイグウ）を立てるといふくだりが出てきます。天皇には神と交流（交信）する重要な役割がありますので、新天皇が即位される時には、あらためて神との関係作りをする必要があるのです。

大嘗祭（オホノチヨウサイ）といわれる儀式が今日でも継承されていますが、天皇即位に当たり、神官や使者以外に無くてはならない存在が「齋宮」（または「齋王：サイウ）といわれる未婚の女性でした。当時は遠く伊勢神宮まで下向し、その後も永く神事に仕え穢れ無き生活を送らねばなりません。つまり、次の御代替りがあるまでは独身のまま過ごさねばならないのです。従って、心痛の面持ちで都を離れて暮らした方や、恋人と別れざるを得なかった悲恋物語も多かったようですね。

平安末期の齋王・式子（シシ）内親王

後白河院の第三皇女。賀茂の齋院となるが病気で退下。独身のまま、後年出家。晩年は陰謀事件にも巻き込まれた。源平合戦の頃の歌人としても有名です。

『百人一首』には下記の歌が挙げられています。

玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶことの よわりもぞする

わが命よ、絶えてしまうのなら絶えてしまえ。このまま生き長らえていたならば、耐え忍ぶ心が弱まって、人目につくようにでもなったら困るから。

内田康夫の浅見光彦シリーズに『齋王の葬列』があります。舞台は滋賀県土山町。1号線で滋賀県から鈴鹿峠（三重県）に至る街道筋に当たります。土山町には「垂水齋王頓宮跡」という森があり、森の中に小さな祠もあります。往時はこの地を經由して伊勢へ向かったようです。近くには龍樹神社と野洲川（「古事記」に出る「天の安の河」？）がありますので、この辺りの河原で禊をしたのではないのでしょうか。今日では工場の廃液が流れています。

【齋王代】（サイオウダイ） 葵祭り（齋王代行列）・・・5月15日（水）

新緑の京都を彩る平安絵巻、京都三大祭のトップを飾る「葵祭り」（正式名は賀茂祭）のヒロインです。齋王の代役なので齋王代と呼びますが、両賀茂社（上賀茂神社と下鴨神社）に奉仕する女性のことです。元来は正式の齋王が天皇家の内親王から選ばれておりました。祭りの起源とされる1400年前（欽明天皇の御代）には齋王の存在は無く、平安時代初期に嵯峨天皇（桓武天皇の第二皇子）が創設した制度です。初代齋王は有智子（ウチシ）内親王。

祭り自体もこの時に「勅祭」（国の祭）となりました。齋王の制度は鎌倉初期（13世紀初頭）に財政上の理由などから途絶えてしまい（最後の35代齋王は札子（レシ）内親王）、何と戦後の昭和31年（1956）に代役の齋王代が復活した次第です。

尚、賀茂社の齋王がお住まいになる所を「齋院」と申しますが、紫野という地域にあったようです。昨年、場所が特定されたとニュースになっておりました。

一方、初代の齋王代は伊藤文子さんで、今年は第47代・倉斗（クラズ）絢子さんです。齋王代は地元の、いわゆる良家の娘さんから選ばれます。例えば、何代も続く老舗料理屋とか西陣織物商とかですね。今年の倉斗さんは裏千家茶道教授の長女です。これまで親娘2代にわたってとか姉妹揃って務めた例（過去7回）があり、平成2年には三姉妹揃ってのケースが生まれました。尚、今年の倉斗さんは東京の白百合女子大学4年として東京にお住まいですから、京都府外在住者による齋王代は初のケースらしいです。

【御阿礼ミアレ神事】

神社で春秋に決まっておこなわれる例大祭は、通常は定まったスタイルで執り行われており、中核部分の概要は下記のようなものです。一部は秘事として拝見することができません。

- ① 山（または本殿）に籠っておられる神様をお迎えする神事を行い、神輿に載せる。
- ② 神輿を街中に運んで、通常は「御旅所（オビシヨ）」という場所に安置する。
- ③ 一定期間（例えば1週間）、芸能を奉納し、儀式を営む。また供物を献納する。
- ④ その後、再び神輿で「御旅所」から運び出し、神事を行い元の山（本殿）にお送りする。

①と②をまとめて「神幸祭」、④を「還幸祭」と呼んでおります。葵祭りの例で申しますと、本祭の3日前の12日に、上賀茂神社側と下鴨神社側とで別々に神幸祭が営まれています。前者は御阿礼祭、後者は御陰（ミカゲ）祭であり、あわせて「御阿礼」と呼ばれております。両社の神奈備（カナビ）山である神山と御陰山で神をお迎えする儀式（神事）が執り行われ、御阿礼祭の方は夜中に行われる秘事で拝見できません。また両社ともに御旅所はそれぞれの社殿となっています。御阿礼の原義は「御・在れ」あるいは「御・現れ」といわれており、聖なる神や霊力の活力を信じた意識や信仰が存在していたことを示すと思われま

【賀茂氏と賀茂社】

古代の氏族としては大伴氏・物部氏・葛城氏・三輪氏などが特に有名ですが、賀茂氏は三輪氏あるいは葛城氏の支流であり、奈良から京都府南部へ移住し、さらに鴨川域を北上して現在の下鴨・上賀茂あたりに定住したようです。秦氏とも深い関連が認められます。

在来の住民とどのように折り合いをつけたかは不明ですが、彼らの出身地の奈良は当時では文化の発達した最先端地域でありましたから、彼らもたらす技術（特に農耕技術）や知識は在来住民の信頼と尊敬を勝ち得たのです。その後次第に賀茂氏は上層住民となり、自らの氏神をこの地域にも浸透させていくのですが、それが今日の下鴨神社（正式名称は賀茂御祖（カモミヤ）神社）と上賀茂神社（同じく賀茂別雷（カモイワガチ）神社）となるのです。祭神はそれぞれ賀茂健角身命（カモケツミノミコト）と別雷命（ワケイガチノミコト）です。

神話伝説によりますと、賀茂氏が祖神と仰ぐ賀茂健角身命の娘である玉依姫（タヨリヒメ）が別雷命を産んだということになっております。とはいえ、どちらが先に建てられたかを示すものでも、格の上下を示すものでもないようです。両社ともに伊勢神宮に準ずる社として皇室の篤い崇敬を受け、また徳川家康が信奉したため徳川幕府の篤い庇護も受けます。これは徳川の家紋（三つ葉葵）と賀茂社の神紋（双葉葵）の類似からと言われております。また一説には、皇室との関係をうまく保つため、政治的な判断で賀茂社の神紋を意図的に家紋としたとも。そういえば、徳川氏は新田氏の出自（清和天皇の流れである清和源氏）を名乗っていますね。小泉神話は色褪せてしまいましたが、こちらは今なお彩り豊かです。

葵祭に供される葵は双葉葵（ウマノズクサ科の多年草）であり、冬葵や銭葵・立葵とは異なる。早くから賀茂の神事に使われ、賀茂社の神紋にも用いられてきた。古来より上社や下社の近辺にも、神奈備山にも自生・群生していたと思われる。

前出の式子内親王が詠んだ歌もあります。（『千載和歌集』）

賀茂のいつき（斎王）おり給ひて後、祭のみあれの日、人のあふい（葵）たてまつりて侍りけるにかきつけ侍りける、

神山のふもとなれしあふい草 ひき別れてぞ年はへにける

尚、両社では本祭に先立ち葵を採り集め、事前に御所へ献納されています。そして祭の当日は、内裏宸殿の御簾（ミス）をはじめ、御所車、勅使、供奉者の衣冠、牛馬にいたるまで、すべて葵の葉で飾られることになり、葵祭といわれる由縁である。

【賀茂祭（葵祭）】

本祭（齋王代行列）は15日ですが、先述したように多くの儀式（神事）や芸能奉納が営まれます。行列は祭の一部分でしかないので、重要な儀式を両社について紹介します。

	上賀茂神社（賀茂別雷神社）	下鴨神社（賀茂御祖神社）
5月 1日	競馬会足沙（クラベウマアヅロ）式	
5月 3日		流鏝馬（ヤブサメ）神事
上旬吉日	御禊（ゴケイ）・・・下社と隔年開催	御禊（ゴケイ）・・・上社と隔年開催
5月 4日	齋王代が御手洗川で禊をします	齋王代が御手洗川で禊をします
5月 5日	競馬会（クラベウマエ）神事	歩射（フシヤ）神事
5月12日	御阿礼（ミアレ）神事（神山：コヤマ）	御陰（ミカゲ）神事（御陰ミカゲ山）
5月15日	例祭賀茂祭（葵祭） 路頭（ロウ）の儀・・・齋王代行列のこと 社頭（シャウ）の儀・・・両社社殿前での儀式	

上社の競馬会というのは2頭の馬を競走させ、その結果でその年の五穀豊穰を占います。乗尻（ノリヅリ）と呼ばれる騎手が赤装束（左方）と黒装束（右方）に分かれて登場します。全部で5組走りますが、最初の組は左方が勝つことと決められています。従いまして2組目からが本当の競争となります。競争と申しましてもただ走るだけでなく、乗尻は疾走途中で予め定められた姿勢をとるなどの規定演技をしなければなりません。

1日の足沙式はいわばリハーサルに当たり、番組みや馬の健康状態もチェックされます。5日の当日に体調の悪くなる馬も出てきますから、当日の倍程度の頭数が用意されます。この日のために、日本名馬会という団体が滋賀県において調教・養育しております。

下社の流鏝馬はご存知かと思いますが、疾駆する馬上から騎手が的を矢で射る競技です。三ヶ所ある的に向けて、騎手は『インヨー（陰陽）』の掛け声とともに矢を射ております。アメリカのブッシュ大統領が来日された折も、場所は東京でしたがご覧になりましたね。

歩射神事は祭の沿道の邪気を祓う意味があるとのこと。直垂姿の射手が楼門内の広場において大的に次々と雨だれ拍子に矢を放ち（大的式）、ついで楼門の屋根を越すように鏝矢を放ちます（屋越しの神事）。両方とも武家故実を伝える小笠原一門が奉仕しています。

両社で隔年で行われる御禊は、両社の境内にある御手洗川（上社では櫛の小川、下社では瀬見の小川）のほとりで行われます。往時はもちろん、鴨川にて行われていたのです。今はそれに及ばないものの、華麗な装束の齋王代が多くの女人を従え列座する姿は、新緑に映えて大変美しいものです。例年、テレビ・ニュースで流されていますね。

ちなみに、櫛の小川は藤原家隆の有名な歌に登場しますよ。毎年6月30日に行われる「夏越祓式」（ナゴシハラエ）を歌ったものです。現在でも夕闇が迫る頃に儀式が営まれます。

風そよぐ ならの小川の夕ぐれは みそぎぞ夏の しるしなりける（百人一首）

12日以降はここでの説明は省きますが、15日の本祭までにこれだけの過程を踏んでゆくわけ。神事という意味では、最重要なものは12日の御阿礼・御陰神事といえるのではないのでしょうか。やはり主人公の神様の登場を願わないことには、祭は始まらず、また成り立たないのです。私が祭の一連を追いかける理由もそこにあります。

とはいえ、平安時代以降齋王の制度が定められてからは、その華麗な美しさもさることながら、やんごとなき貴人の悲しいような運命に感じてか、見物人が押し寄せたようです。『源氏物語』の中でも、まことに有名なシーンが展開されています。それは、葵の上の車と六条御息所（ミヤストコ）の車とが先の道を争う場面です。作者の紫式部も祭を眺めたに違いないでしょうが、いったいどの辺りで見いていたのでしょうか。